

# 大学教職課程における「小学校における外国語・英語科に関する専門的事項」についての研究

－ 児童文学、ゲームや仕草を利用して大学生が英語を話す自信を向上させる －

足立 望

岐阜聖徳学園大学教育学部

Primary School English in a primary teacher training course:  
Aiming at enhancing students' confidence in speaking English by utilizing  
children's literature, games, and gestures

Nozomu ADACHI

## Abstract

"Core curriculum", a new English teacher training curriculum endorsed by Tokyo Gakugei University, recommended that primary school teacher training courses introduce two classes. This paper focuses on Primary School English, which mainly trains university students to improve their knowledge and skills about English. This research will investigate what is effective in enhancing university students' confidence in speaking English. It was suggested that teaching methods for both children and university students, such as use of rhymes, games, drama, gestures and rich input in English, will boost their confidence in speaking English.

Key words : Primary School English, confidence of teaching English in English, children's literature, New Course of Study, pronunciation training

## I. はじめに

次期学習指導要領解説によれば、日本の小学校の英語教育の開始年齢は平成33年度より5年生から3年生となる(文部科学省, 2017)<sup>6)</sup>。そして、3・4年生で外国語活動がそれぞれ年間35時間程度行われ、5・6年生では英語が教科として週2回年間70時間程度教えられる。小学校段階で読み書きが導入され、小学校で英語を教えるためには大学教員養成課程で小学校英語科指導法のみならず、その基礎となる学生の英語力を高めることが益々重要になってきており、小学校の英語教育を担当する教員は英検2級程度の英語力をつけることが期待されている(東京学芸大学, 2017)<sup>11)</sup>。

東京学芸大学(2016)<sup>12)</sup>(2017)<sup>11)</sup>は、文部科学省の委託により、小・中・高校教員の英語力や指導力向上に向けた大学教職課程における教員養成のモデルとなるコアカリキュラムの開発・提言を行った。そして、大学の小学校教員養成課程に2つの科目を設置することを提案した。それは、外国語の指導法(以下略して指導法と呼ぶ)、外国語に関する専門的事項(英語や英語教育に関する知識や、技能に関する科目)(以下専門的事項と呼ぶ)である。本論文では専門的事項に注目する。

## II. コアカリキュラムについての先行研究と本論文の目的

コアカリキュラムでは、子どもに質・量ともに豊かなインプットを与えることが重要であり、そのためには教師となるものの英語力が不可欠であることを強調する。そして、教師には、子どもの認知能力に合わせて英語の使用をコントロールする力、ALTと協働して指導する力、語彙力や表現力が必要であり、また、授業ではライムが音韻認識やプロソディーの獲得に有効である(ibid.)<sup>12)</sup>

さらに、コアカリキュラムでは、2017年に具体的な学習項目が最終的に提示された(ibid.)<sup>11)</sup>。提案された外国語・英語科に関する専門的事項の内容は以下のようである。

- (1) 授業実践に必要な英語力：①聞くこと ②話すこと（やり取り・発表）③読むこと④書くこと  
(2) 英語に関する背景的な知識：①英語に関する基本的な知識（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）②第二言語習得に関する基本的な知識 ③児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）

コアカリキュラムが公表されたのは2016年3月であり、コアカリキュラムについての先行研究は、現在において極めて少ないが、本論文では学生が英語で話す自信に注目する。4技能のうち、教師が子どもに英語を教えるときに一番関連がある技能は4技能のうち英語で話す力であることは明白であり、その際に、英語で授業を教えることができる自信、英語の発音に関する自信は重要と考えられる。

#### 学生の英語の技能について

田辺(2016)<sup>10)</sup>によれば、児童英語科教育法・児童英語教育法演習の授業を通して、ウェブによる学習、英語カフェ、模擬留学、短期留学による学習を行った。その結果、英語に対する不安が若干軽減された。英語運用能力の向上に特に効果があったと学生が考えたのは、模擬留学(英語合宿)、海外研修であった。その結果としてこれらのコースを受けた学生のリーディングやリスニングテストの成績は微増であった。東・小川(2016)<sup>3)</sup>は、コアカリキュラムを生かした専門的事項のシラバスを提示した。彼らは必修の英語科目を増設し、学生に公開講座への参加を促し、海外研修・海外実習を行った。また、スピーチコンテストを行い、小学校英語活動の観察を行った。そして、英語力向上に全学プログラムを通して取り組み、児童学や国語との連携が有効であること、課外活動を取り入れることの重要性を指摘している。しかし、発表から分かる限り、客観的データに基づく4技能の高まりは示されていない。つまり、英語力については、先行研究からは英語を学生が実際に使ってみる活動が有効であり、正しい英語のモデルを提供できる模擬留学や海外研修が有効であることが示唆される。

次期学習指導要領では、中学校や高校では英語によるインプットを重視し、生徒のコミュニケーション力を高めるために原則的に英語で英語の授業を行うことが期待されている。その一方で、大学生の4技能を高めようとする専門的事項を英語で教えることについてはコアカリキュラムでは言及されていないが、英語で専門的事項を教えることに関して研究が進められるべきことは明らかである。専門的事項を英語で教え、英語のインプットを増やすことで学生が英語で話す力や自信が高まることが期待される。担当教員が英語で専門的事項の授業を行い、英語でやりとりをすることは、学生が留学し、英語で生活することに比較的近いと言える。

東・小川(2017)<sup>2)</sup>は、コアカリキュラムを参考にして、専門的事項のシラバスにさらに改良を加え、第2言語習得論を強化したり、絵本や歌を各回の授業の最後の活動として行った。そして、学生が英語を使う体験の大切さを強調している。課題としては、授業の中で学生が英語を使う時間を作ること、専門的事項と指導法の授業との連携について述べている。しかし、専門的事項と指導法の授業との連携に関しては、この先行研究ではその重要性が触れられるにとどまっている。加えて、先行研究では専門的事項内の諸プログラムの連携については触れられていないが、専門的事項内の各プログラムを有機的に連携させ効率的に学ぶことは専門的事項の学習を効果的にするために不可欠と言えよう。指導法と専門的事項間に加えて、専門的事項内での連携を強化することで、専門的事項の学習効率がさらに高まり、参加学生の話す力を含む英語力や、授業へのやる気や満足度が向上すると考えられる。

#### 発音指導について

物井(2011)<sup>7)</sup>によれば、小学校教員養成課程の大学生は、外国語活動・英語活動に関する授業を受けた後でも英語の発音に不安が残る。不安が残る原因として音声学に基づく発音指導は学生にとって難解になりやすいと考えられる。山本は半期で大学生の発音を向上させることは難しいと発音指導の困難さについて述べ、特に中学生が対象の場合はイメージを喚起させる導入が必要であるがそれは簡単ではないとしている(山本, 2015)<sup>13)</sup>。発音指導の困難さを克服するためには、山本が述べているようにイメージを利用することは中学生だけでなく大学生にも有効と考えられる。牧野(2013)<sup>4)</sup>は音声学に基づく発音方法を大学生に指導した後、手鏡や携帯カメラで発音の仕方を撮影するなどして、ダイレクトなイメージを用いて効果的な発音指導が行えたと述べている。しかし、これらの道具を用いる発音指導方法は、小学生や大学生などを対象にして、いつでも簡単に利用できる指導方法とは言いがたい。さらに、学生が適切な発音方法を仮に身につけたとしてもそれを子どもに教えられるようになるにはギャップがあるだろう。このギャップを埋めることが、教員養成課程では必要と言える。

コアカリキュラムにおいて発音指導を重視しているが、上記の懸念は、将来新たに始められる専門的事項や指導法の授業にもあてはまると予想される。発音について不安を持ったまま学生が将来教壇に立つことになる、子どもに英語を自信をもって話したり教えたりできなくなる恐れがあり、これは極めて大きな問題と言える。東・小川(2017)<sup>2)</sup>は市販の発音についてのDVDを学生に視聴させたが、これはそもそも子ども向けのプログラムであり、大学生には必ずしも十分とは言えないだろう。学生が自信をもって発音できるためには学生への発音指導のさらなる工夫が必要と言える。

足立(2017)<sup>1)</sup>は、世界的にもユニークなオイリュトミーを活用して指導法(「外国語活動」)で発音や指導法について教えた。これは上記の問題を克服しようとするものである。この方法は、音声学の説明に加えてジェスチャーを用いて発音の仕方をイメージとして提示する。その結果、学生はオイリュトミーを活用した発音指導や英語指導方法に全般的にポジティブな反応を示した。つまり、オイリュトミーを専門的事項でも活用することで発音指導を無理なく効果的に行えると考えられる。

音声学に基づく発音指導にオイリュトミーを用いて仕草を加えることで、発音指導をイメージとしてわかりやすくすることができる。オイリュトミーは、シュタイナーによれば、人が話す時の空気の動きを体全体で表現する(Steiner, 1979)<sup>9)</sup>。英語の発音を教える際にアメリカ手話言語を用いて英語を教えるという先行研究も見られるが(Zvi, 2012)<sup>10)</sup>、そこでは音と体の動きとの必然的なつながりは明確ではない。一方、オイリュトミーを活用することで英語の音をジェスチャーを通して体全体で体験でき、英語の発音がしやすく、覚えやすくなると考えられる。

足立(2017)<sup>1)</sup>は、小学校英語指導法の授業で、オイリュトミーを活用しつつ発音練習を行った。たとえば[e]という音であるが、腕をXの形に交差させ、腕を合わせてオイリュトミーの形を作る。[e]という音は自分自身を守るために対象から離れる、あるいは抵抗する感情を表現する。以下にオイリュトミーを使ってフォニックス指導を行う例を示す。たとえば“E”とアルファベットの名前を言う。次にオイリュトミー(しぐさ:腕でXの形を作る)の[e]のポーズをし、最後にたとえばelephant(単語を発音しながら仕草で象を表す)という練習をする。このように最後に単語を言い、単語の意味を表す仕草を添えることで、[e]という音のオイリュトミーを使いつつ単語を教えることができる。

それではさらにどのようにして単語だけではなく英文を教えられるのであろうか。一番強く読むストレスが来る音にオイリュトミーの動きを添えるとよい(強く発音される複数の音に動きをつけたり、子音に子音のオイリュトミーの動きをつけてもよい)。このように母音や子音に動きを添えることで、単なる発音の繰り返しの練習ではなく、学習者が自然と意味を感じることができ、楽しく印象深く英語を学ぶことができる。

加えてアクセントについてはどうだろうか。チャンツ等を用いて強い音節で手をたたくことが一般的に行われているが、足でステップを刻むこともできる。強い音でステップを長くする。シュタイナーは、足のステップが子どもの言葉のリズムの習得に影響を及ぼすと考えた。つまり、足でステップを刻むことによってアクセントを実感・習得できることが期待される。これが示唆することは、例えばダンスを用いた英語の指導がアクセントなどの習得に効果的であることである。

ソシュールらが考えるように、発音と意味のつながりは恣意的であると考えるのが一般的である(Makkai, 1995)<sup>5)</sup>が、オノマトペに言語普遍性が認められるとの先行研究もある(佐伯他, 2015)<sup>8)</sup>。仕草や動きによって音と意味のつながりを作りだし、それを体験しようとするオイリュトミーは革新的である。なぜなら、オイリュトミーを学ぶことを通じて、諸言語の音声の本質的意味を体感でき、言語そのものの理解が深まるからである。シュタイナーは母音は人の感情、子音は外界の模倣を言語器官が行っていると考えた。この見方は実証的に検証されなければならないが、オイリュトミーを活用する発音・音声指導は外国語教育のみならず、言語教育全体に影響を与える可能性がある。

上記の足立の研究(2017)<sup>1)</sup>においては、発音指導の効果について十分に明らかにされていない。オイリュトミーを用いた極めてユニークな発音指導は上記の記述によって、理論・指導方法についてさらに明らかになったが、大学生への発音指導の効果をさらに解明する必要がある。

## 本論文の目的

本論文の目的は以下の2つを検証することである。英語ラウンジを利用し、英語で授業を進めることが学生が小学校で英語で教える自信に与える効果及び、仕草を用いることが学生の発音の向上にもたらす効果を検証することである。本論文のリサーチクエスションは以下である。

- ① できる限り英語で専門的事項に当たる授業を行い、課外活動として英語ラウンジを利用し、学生が小学校で英語で教えられる自信が高まるか。

- ② 仕草（オイリュトミー）を活用して発音指導を行い、学生がその効果を認めるか。それぞれのリサーチクエスチョンについて、さらに詳しく述べる。
- i) 課外活動として、学生は大学の英語ラウンジに行き、時間に余裕のあるときに自由に学生がラウンジスタッフ等と英語で話す。このことに加えて専門的事項を筆者が英語で教えることによって、学生が英語で授業を行う自信が高まるかについて検証を行う。
  - ii) 発音指導の工夫として、オイリュトミーという、音に対応する仕草・動きを専門的事項で活用し、学生がオイリュトミーの使用について効果を認めるかどうかを検証する。

### Ⅲ. 方法

上述の研究目的に沿ってアンケート調査を行い、その結果を分析・考察する。

#### 1. アンケートの目的

「児童英語」（私立大学2年生、2016年度後期：専門的事項に相当する選択科目）の授業において上述のような授業の工夫をし、アンケート調査を行い、上述のリサーチクエスチョンの検証を行う。

#### 2. 対象

「児童英語」を履修した教育学部の学生35名（英語専修を中心に様々な専修の学生から成り立つ）。

#### 3. アンケートの期日及びアンケート内容

前半（2016年9月28日）、後半（2017年1月18日）計2回、調査に同意する学生に対して授業で、5段階のリッカートスケールと自由記述を用いて以下の項目のアンケート調査を行った。前後半とも回答したのは19名で、自由記述は前半21名、後半は35名であった。項目は以下のようである。

- 1) あなたは小学校で英語で授業ができますか(前半・後半)
- 2) この授業を受けて良かったですか(後半)
- 3) 良かった活動を選び、自由記述をする。
- 4) 感想・要望についての自由記述（紙幅の都合上、部分的な記述を行う）

#### 4. 専門的事項に当たる児童英語の授業内容について

筆者は、上記の「児童英語」「小学校外国語活動」（同3年生後期開講：選択科目）という2つの授業を担当している。前者は専門的事項、後者は指導法に相当する科目である。本研究では児童英語の授業に焦点を当てる。最初の授業で、学生自身のニーズの調査を行い、児童英語の授業で指導法も知りたいという要望の多さから専門的事項と指導法の授業とをできるだけ連携させるよう工夫した。また、下記に見られるよう、専門的事項内の各プログラムを連携させ、できる限り学習の効率化を図った。ただし、従来のシラバスの中で行える授業の工夫を行い、従来のシラバスには手は加えなかった。

##### 児童英語の授業内容

聞く：ピーターパンのお話の映像を見て、内容について語らせた。これはたとえば、後に劇発表の題材となる。次に、聞くときに問題となる音の変化について解説し発音の練習をした。音の連結等による音の変化は、次期学習指導要領では、小学生が学ぶ学習項目となっている（文部科学省、2017）<sup>6)</sup>。

発音指導・話す：毎回の授業の最初に、児童向けの英語の詩や歌、ゲームを発展的に行った。まず、発音指導を、話す練習の前に行った。なぜなら適切な発音を学ばずしてスピーキングの練習をしても、効果が薄いと考えられるからである。そして、オイリュトミーを活用して発音指導を行った。さらに、できる限り筆者が英語で授業を行った。また、スピーキングの時間では、子どもの発話を助けるティーチャートークについて解説した。つまり、難しい言葉話すときにゆっくり話したり繰り返したり、簡単な言葉を用いたり、仕草を用いたりする工夫である。教室英語を学び、さらに英語ラウンジで英語で自由に話すことを薦めた。

読む：英語圏の文化に関わる事柄を題材にし、before reading, while reading, post readingの指導について解説した。読む前に背景知識等について話し合い、発問を通して実践的に本文の理解をした。また、つなぎ言葉について学んだ。読む材料を異文化理解と結び付け、効率的に学び、さらに多読させ、まとめと感想を英語で書く課題を課した。

フォニックス：オイリュトミーを用いて分かりやすく基本的な母音・子音、連続子音、マジック e 等

を練習した。この際、子どもに用いるゲームを用いつつ、フォニックス指導を学べるよう配慮した。

異文化理解：リーディングにおいて、オーストラリアやニュージーランドの異文化理解に関わる資料を用いて、読むことを通してこれらの地域について学んだ。国際交流については、長く英国やドイツに留学しオイリュトミーを学び、イスラエルで日本語や英語を教えている外部講師を招き、学生が英語でオイリュトミーを学ぶことを通して、体験的な異文化理解をはかった。

書くこと：多読や英語ラウンジでの活動について英語でまとめや感想を毎週そして冬休みに書かせた。冬休みの課題は、500語以上書かせることを課題としたが、多くの学生が課題を意欲的に行っており、目立つ間違いを訂正し、返却した。また、読む時間につき言葉について学んだ。

語彙・文法：英検準2級、2級、準1級の問題集を参考にして、必要不可欠と思われる内容について、問題を授業中に解く形で確認した。この際も英語で質問し答えることを基本とした。

絵本・お話：筆者が絵本を読んでゲームをし、絵本の読み方を指導した後で、ペアで読む練習やゲームをする練習を行った。

英語劇：英語劇（ピーターパン）を演じつつ、演出方法、劇の教え方を教えた。この際、オイリュトミーを用いて演出を行った。さらに、劇の題材を用いてゲームを行った。最後に、グループで劇を演じ、ゲームを教えるという活動を行った。この活動の目的は、動きを用いつつ子どもに印象深く英語を習得させることを学生が学ぶためである。

#### IV. 結果及び分析

次に上記の1)～4)のアンケート結果について記述する。

##### 1) 小学校で英語で授業を行う自信について

表1 あなたは小学校で英語で授業ができますか

|   | 人数 | 平均     | S. D.  |         |
|---|----|--------|--------|---------|
| 前 | 19 | 2.2105 | 0.8932 | F=4.21  |
| 後 | 19 | 2.9474 | 0.8255 | **p<.01 |

表1によれば、英語で授業ができるかという項目について平均値が5段階のうち2.2から2.9に有意な伸びを示している(分散分析による)。つまりこの授業は英語で授業を行う自信をつけるのに有効であることが示唆される。ただし、伸びは見られたものの高い数値と言えず、さらなる工夫が必要である。次に前半の自由記述を見てみよう。回答者は21人で、複数回答である。紙幅の都合上、自由記述の表現を短くしたり、質問に関係のない回答は省略する。

話す力が不足・自信がない(11)、[授業をしたことがない、やり方が分からない](5)、教室英語が分からない(3)。下記の回答者は各1名である。

語彙力が足りない。どう始めたら子どもの気持ちがあかめるか分からない。どうしたら英語を定着させることができるか分からない。リスニングが苦手。子どもの理解力に個人差がある。どの場面でどんな英語を使ったらよいか分からない。発音を間違っていて覚えている言葉がある。

授業を受ける前は、話す力が不足していること、授業をしたことがないことから不安であるといったネガティブな意見が多い。次に自由記述の後半を見てみよう。回答者は35人で複数回答である。

英語力には自信がない(9)、実践したことがないので分からない(4)。分かりやすく英語を話す技量がない(2)、[教室英語を使えるようになった、教室英語を学んだ](4)、準備をすればできる(2)、すぐには言葉が出てこない(2)。下記は回答者各1名である。

テストで扱った内容を勉強すれば多少英語で話せる。英語の授業は何をしたら良いか分からないが、外国語活動であればできる。教室英語を学んだり劇を通して少し自信がついた。どのように英語に対する興味を引き出すか学べた。ゲームをたくさんしれた。ジェスチャーを取り入れたい。英語と日本語をどう交ぜたら良いか分からない。効果的な指導法を学んだ。英語の授業をするときに気をつけるべきことをこの授業で学びたかった。語彙力に自信がない。習ったことを生かせるが、まだ自信はない。子どもの英語に対する興味関心が授業で大事になってくる。教室英語を学んだり、ゲームなどで接し方が少し分かった。導入は少しできる。あきないようわかりやすくする自信はない。活動内容は分かったが、何を学ばせれば良いか、どこまで達成したら良いかわかならなかった。いざとなると教室英語がまだう

まくつかえないので教える自信はあまりない。教室英語を身につけられ、スピーキング能力がついたが、どう伝えるかという伝え方にこだわるべきだと思った。

授業を受けた後では、英語で教えられるという自信は前よりは増えているようである。英語で授業を理解し英語でやりとりを行い、教室英語やゲームや歌を体験することで不安が減っていることも考えられる。自由に話す指導に関して、歌やゲーム、劇といった子どもに実際に教える活動を学生に体験させることは有益であり、英語を話す自信につながる可能性がある。なぜなら、そういったことを学生は将来子どもに教えるからである。また、学生は子どもにどう接したら良いかにも関心がある。総じて、学生が自由に話せるようになるためのさらなる練習が必要である。たとえば、子どもにわかりやすい英語の話し方や、英語と日本語との使い分けや、教室英語を用いつつ自由に英語を用いる練習をさらに行う必要があると言えるだろう。

## 2) 専門的事項の授業の満足度について

この授業の全体的な満足度は5点満点中、平均4.0であり(計35人)、おおむね良かったが、2や3を書いている学生もいるのはこれからの課題である。以下学生が評価した活動をまとめる。

## 3) 良かった活動について

良かった活動

良かった活動(後半:回答者は計35人で複数回答でいくつ選んでもよい)

教室英語(23)、発音の仕方(22)、ゲーム(16)、英語劇発表(12)、フォニックス(11)、話すこと(10)、オイリュトミー(6)、英語劇の教え方(5)、読むこと(3)、語彙や文法(3)、聞くこと(2)、絵本(2)

このリストからは、教室英語や発音練習、ゲーム、英語劇の発表、フォニックスや話すことが好評であったことがわかる。英語をうまく話せないことに問題意識があり、さらに楽しく授業を教えることに関心があるということから、教室英語や発音練習、ゲームや英語劇の評価が高くなったと考えられる。オイリュトミーを用いたフォニックス指導や、発音指導の評価が高い。他の自由記述欄には、発音をもっと学びたいという意見や、オイリュトミーや発音について学べて良かったなど(以下にさらに例を挙げる)オイリュトミーを用いた発音指導方法や英語指導方法について肯定的な意見を11人が書いており(35人中)、否定的な意見は全く見られなかった。上記の意見以外は以下のようなものである。オイリュトミーを使うと楽しく発音を学ぶことができる。発音のイメージがしやすくなる・分かりやすくなる。子ども目線で教えることができる。体を使ってするとよく覚える。オイリュトミーを使った方法で英語を教えるのは新しく面白い。子どもに教えるときにオイリュトミーを使ってみたい、など。また、オイリュトミーを授業でもっと利用してほしいという意見が複数見られた。

つまり、オイリュトミーを使った発音指導法や英語の教え方は、発音の仕方をイメージしやすく、分かりやすく、体を使って覚えやすく楽しい。子どもに発音や英語を教えるときにもオイリュトミーを用いることで分かりやすく楽しく教えることができるだろうというのが学生の感想と言える。

役に立つ課外活動(後半;回答者は計35人で複数回答)

ラウンジ(20)、英語での読書(10)

先行研究にあるように英語ラウンジの評価が高い。ラウンジについての自由記述について以下に記す(複数回答)。

ラウンジ

ラウンジに行くきっかけになった(12)、ラウンジに行くと英語を話さなければと思う(5)。

右記は各1名の記述である:最初は強制だが、楽しくなった。ラウンジ(で得たこと)は授業で活用できる。ラウンジで話すのは英語力向上につながった(わからないことをスタッフが教えてくれるから)。ラウンジ、読書とも強制されることで体験を通して英語力を高めたいと思った。ラウンジは他の学部の学生が多くて入れない。

先行研究にあるように、自主的に自由に英語を話すことは、英語を話す力や自信の促進につながることを示唆される。これからの課題として、学生がさらに正しいモデルを見ながら英語でやりとりができ

るようにラウンジのスタッフをさらに増やすなどの工夫や、参加者全員がラウンジを利用できるような工夫、授業が終了してからも継続してラウンジに行き続けるための工夫などが必要と思われる。

## V. 考察

専門的事項に当たる科目で、学生は教室英語を積極的に学び、英語ラウンジを利用し、筆者が英語で専門的事項の授業を行うことで、学生の英語で授業をする自信の高まりが見られた。筆者が英語で授業を行うことについて学生の記述はほとんど見られなかったが、英語で専門的事項を教えることは、話すモデルとしての適切なインプットや、モデルを見ながらのインタラクションを増やす有効な方法であり、さらにどのように英語で英語を教えたらよいかを学生に提示する絶好のチャンスとなる。学生の自由記述には、日本語と英語を使い分ける練習や、子どもに英語を分かりやすく話す練習、教室英語を用いつつ自由に聞いたり話したりする練習をさらに取り入れるとよいとの声もあった。このような練習をさらに増やしつつ、英語で専門的事項を教えて、教師の話し方のモデルを提示し、さらに本研究で行ったように模擬授業を積極的に行うことで、英語で英語の授業を教えることに自信をつけさせることができると言えよう。一方で、英語ラウンジなどでスタッフを交えて学生が積極的に英語で自由に会話することも有益と言える。これに加えて、国内や海外の子どもや学生などとの（スカイプなどを用いた）英語による交流や、英語合宿、海外研修を行うことなども有効と考えられる。

アンケートの自由記述から、学生に不安を与えやすい発音練習も、世界的にもユニークなオイリュトミーの仕草を活用することで学生にとって楽しく満足のゆくものになり、発音に対する理解や関心が高まり、発音を子どもに教えることに自信がつくであろうことが分かった。発音についてさらに学びたいとの声も見られたので、学生が子どもに発音をうまく教えられまでしっかり反復練習する必要があると言える。結論として、発音指導の際に仕草を用いることで、学生は音声学による説明のみによる発音練習よりも、英語の発音方法にさらに親しみを覚え、発音やフォニックスを子どもに教える際にも仕草を使って楽しく自信をもって教えることができるようになる可能性が認められる。オイリュトミーを使って英語を教えることを学ぶことで指導法と深く連携することにより、英語で教えることにさらに自信が出るとも言える。一方で、オイリュトミーを用いた発音指導が学生や子どもの発音の向上にもたらす効果について実証的に検証していくことはこれからの研究課題である。オイリュトミーを発音指導や単語やターゲットセンテンスの学習に活用する方法は、音を体感できるという点で世界レベルで革新的であり、これからさらに開発・実証的研究を続ける必要があるだろう。

## V. おわりに

本研究全体から分かることは、学生の話す自信を高めるためには、仕草を用いて英語の発音の理解や自信を高め、専門的事項の担当教員が教科科目を英語で教え、有意義なインプットやインタラクション・アウトプットを増やすことが有効であろうということである。そして、専門的事項、指導法の壁を壊して、子どもに教える活動を通して学生の英語力を高めることが学生のやる気や満足度を高める上で有効であろうということも分かった。英語で専門的事項を教えること、オイリュトミーを用いたりすることなどによる専門的事項・指導法の2教科の連携、そして専門的事項内の各プログラムの連携が小学校教員養成プログラム成功の鍵を握っているようにも思われる。

次期学習指導要領の目標にあるように、子どもに知識・技能を習得させ、思考、判断、表現力を育成し、学びに向かう力、人間性等を滋養するためには、それを教える教師となるものが対話を通して深く考え、表現し、知識・技能を高め、主体的に学んでいくことが不可欠と言える。学生の英語の4技能を高める活動において、学生自身の関心のある事柄や、価値観・文化観、英語を学ぶ方法や教え方、専門的事項の授業内容や進め方等について、専門的事項の授業内外で「英語で」積極的に話し合ったりすることで、学生のやる気が向上し、有機的に4技能を高め、学生自身の思考・判断力・表現力、学びに向かう力（主体的に学ぶ力）や人間性等を高めることにつながる可能性がある。このような話し合いは学内にとどまらず、国内、海外の大学等との（国際）交流を進める中でさらに充実したものになると考えられる。専門的事項の担当教員と学生との連携（学生自身のニーズの分析を含む）を国内・外にボトムアップでさらに広め、大学間などでの交流をさらに進め、英語教育や、広く環境問題などの諸問題について国際交流にまで広げて話し合ったりすることが学生の資質・能力の向上や専門的事項の充実につながる

のではないだろうか。専門的事項で扱われる異文化間の（国際）交流に関しても、テーマは文化に留まらず、特に英語教育を中心にして、国内・海外の教育学部の学生や教員と英語で交流することも極めて有意義であろう。このようなさらに充実した専門的事項の学習を行っていくためにも専門的事項を英語で教えることが不可欠と言える。

専門的事項と指導科目の連携を行うためにも、コアカリキュラムをそのまま行うトップダウンの計画だけではなく、学生自身のニーズの分析を行い、学生が主体的に学びたいと思うオイリュトミー(仕草の利用)などのアイデアを取り入れるなど、全てを貫く根本的な原理や理念、指導技術などの再検討や深化が重要であり、さらに、それらについて学生と英語で話し合い問題解決をしてゆく中で、共に専門的事項・指導法の授業を作ってゆく姿勢が大切と言えよう。なぜなら、まだ教壇には立っていない学生自身が、子どもとともに未来の英語教育を作ってゆくわけであり、教員養成課程の学生こそ、英語教育を通して、教育基本法第1条で示された人格の完成という教育の理想を目指し、世界のあらゆる人々と協力して、(英語で話し)深く考え、環境問題などの諸問題を創造的に解決し、子ども達とともによりよい社会を作ってゆくことを「主体的に」学び続けていくことが大切であると考えられるからである。そして、英語の4技能を高めなければいけないという暗黙の重圧だけでなく、人間性や創造性といった人格の完成(学びに向かう力、人間性等)という教育の理想を目指して専門的事項や指導法をみんなで作ってゆこうとするとき、教育に関わる全ての人のやる気が高まり、学生や子どもたちの豊かな知識・4技能、思考力・判断力・表現力を飛躍的に高められるのかもしれない。

## 注・文献

- 1) 足立望 (2017) : 大学教職課程におけるコアカリキュラムについての実践的研究, 岐阜聖徳学園大学教育学部教育実践研究センター紀要 16号, 161-170.
- 2) 東仁美・小川隆夫 (2017) : コアカリキュラムに沿った小学校教員養成プログラムの開発, 第17回小学校英語教育学会兵庫大会要項集, 93.
- 3) 東仁美・小川隆夫 (2016) : 教科に関する科目(外国語)のプログラム開発, 第16回小学校英語教育学会宮城大会要項集, 123.
- 4) 牧野眞貴 (2013) : 学生が効果的に感じる英語発音トレーニングの実践報告, 関西大学外国語教育フォーラム (12), 121-134.
- 5) Makkai, A. (1995) "Rudolf Steiner on Language" in Rudolf Steiner, *The Genius of Language*, Translated by Teutsch, G. & Pusch, R., Anthroposophic Press, New York.
- 6) 文部科学省 (2017) : 小学校外国語指導要領解説,  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017\\_11\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/07/25/1387017_11_1.pdf)
- 7) 物井尚子 (2011) : 「外国語活動」授業力を備えた教員養成のためのシラバスに関する一考察, 千葉大学教育学部研究紀要, 59, 21-27.
- 8) 佐伯他 (2015) 音象徴語に潜む言語普遍性と個別性, 日本認知言語学会論文集, 15, 301-308.
- 9) Steiner, R. (1979) : GA304 Erziehungs- und Unterrichtsmethoden auf anthroposophischer Grundlage, Rudolf Steiner Verlag, Dornach.
- 10) 田辺尚子 (2016) : 小学校英語教育に対応できる教員養成のためのカリキュラム開発, 第16回小学校英語教育学会宮城大会要項集, 93.
- 11) 東京学芸大学 (2017) : 英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業:平成28年度報告書.
- 12) 東京学芸大学 (2016) : 英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業:平成27年度報告書.
- 13) 山本誠子 (2015) 英語音声学(教職科目)における発音指導力の養成—学生自身の発音能力の分析—, 教育開発センタージャーナル, 7, 35-44.
- 14) Zvi, Z. (2012) Using ASL in the EFL classroom to practice speaking, *The Language Teacher* 36(1), 30-31.